

義母のくすぐりが止まらない

く触れたい衝動く



白藤ユウトは、今年から大学に通う、1年生だ。

父親（白藤サトル）と2人暮らし——幼い頃に両親が離婚してからずっと2人で暮らしてきた。

この偏差値の高い大学に合格できたのも、父親が男手一つで自分を育ててくれたおかげである。ここまでわがままを聞いてもらって、将来の為にいきたい大学にも入れた。そんな父の為に頑張っていたと思った。

そんなある日、父から「会わせたい人がいる」と言われ、後日、面会の日を迎える。

とある店で一人待っていると、父がある女性を連れてきた。

「初めまして。雨代マユミと申します。サトルさんにはいつもお世話になっております」

雨代マユミ。以前、父から聞いた「知人の紹介で知り合った人」がこの女性だった。マユミさんの印象は「大人の色気があり、おしとやかで魅力的な女性」だと思った。

三人で話している時に、たまに目が合うと、向こうが甘い表情で見てきて、一瞬ゾワッとさせられた。気のせいだろうか——マユミさんが自分に向ける視線が、父さんを見る時とは少し違って見えた。大人の女性とこんな風に話すことに慣れていない自分自身の緊張。そう思い込んでいた。

そして、「大事な話がある」と切り出される。マユミさんと「結婚を前提にお付き合いしようと思ってる」と。

幸せそうな父を見て、応援したい、背中を押した。——交際が続き、しばらくして二人は籍せきを入れ、正式に夫婦なった。こうして、三人で一緒に暮らすことになる。

「今日からマユミさんが一緒に暮らすことになるから。改めてよろしくね、ユウト」

「サトルさんもユウトくんも、今日からお世話になります。至らない点もあるかと思いますが、よろしくお願いします。」

マユミは丁寧な挨拶をしてくれた。まだ「一緒に暮らす」という実感はないが、父のためにもいい関係を築いていければと思う。

最初、マユミに対する緊張からか、ぎこちなかったが、彼女の方から話しかけてくれたり、自然と学校のこととも私生活のこととも相談できるようになっていた。一緒にいるうちに、少しずつ家族に近づけているのかもしれない。

距離を縮めようとしているのか、ふとしたときにマユミの方から近づいてくる。

「ユウトくんって、彼女とかいないの？」

そんな甘い問いかけに一瞬ドキッとしたが、コミュニケーションの一つとして話しかけてきているのだろう。大人の女性にそんな風に聞かれることが新鮮だった。

あるとき、父の帰りをマユミと二人で待っていると——雑談の流れで、マユミが俺の脇腹わきばらをつつついてきた。

「わっ！ ちょっと！ 辞め下さいっ！」

「えいゝなに？ そこ弱いんだー」



突然のことで敬語になってしまふ。最初に感じたおしとやかな印象とは違ふ、砕けた表情や言葉遣いもあるんだ——そのギャップに、少し面食らった。まだこのときは軽いスキップだけだったが、その頃からマユミにからかわれることが増えていく。

夜ご飯を三人で食べているときのこと。——正面にマユミ、その隣に父が座っている。食事をしていると、マユミの足が俺の足の裏に当たった。一瞬当たっただけだったが、くすぐったさに驚いて箸を止めてしまった。

最初は偶然当たっただけかと思ったが、俺の反応を見たマユミは間髪入れずに足を伸ばし、俺の足をさわさわと触れ始めた。声が出そうになる。冗談混じりに「くすぐりたい」と言おうかと思ったが、父に気づかれたらまずい——抵抗しつつも、バレないようにやり過ごすしかなかった。——そして、父がいない場面で、マユミとの距離が少しずつ縮まってしまふ。

とある日の朝。台所で飲み物を用意していると——

「おはよう」と声をかけられると同時に、後から抱きつかれた。距離の近さに驚いて、何が起こったのか分からなかった。

「おはようございます」

「なんで敬語になっちゃうの？」

突然のことに、また敬語になってしまう。すると後から抱きついたまま、脇腹<sup>わきばら</sup>をこちょこちょと攻めてきた。

「ちよっと！あのっ！」

くすぐったさに、自然と笑い声が漏れる。

「こちょこちょ〜」

「マユミさん！くすぐ、たいですっ！」

思ったより長く続くくすぐりに、耐え切れなくなり変な感覚が込み上げてくる。

「マユミさん、本当、だめですっ！ああっ！」

ガチャツ、と扉が開く音がした。

「おはよう」

父が起きてきた。リビングに入る前に察したのか、間一髪でユウトから離れていく。何事もなかったかのように、その場の会話に溶け込んでいった。

いつもより長く続いたくすぐりに、途中、変な気持ちが湧きそうになった。父が来てくれなかったら、危なかった。女性と触れ合うことの少なかった自分にとって、マユミのあまりの近さに、少しずつ不信感を覚えるようになる。

そんな日が続いた、ある日曜日。

「今日せっかくの休日なのに、急な仕事が入っちゃって。父さん今から仕事行ってくるから」  
玄関に向かい、今にも外に出ようとする父。

「ちょっと、父さん……」

マユミのことを話そうか迷っていると、後ろからマユミが近づいてきた。

「サトルさん、気をつけてね」

「ああ、ありがとう。ユウト、さっきの話だけど……」

「いや、大丈夫……気をつけて行ってらっしゃい」

「そうか。何かあったら、いつでも父さんにでもマユミさんにでも相談するんだぞ」

そう言い残して、父は仕事に出かけてしまった。マユミに聞かれるのが気まずくて、言葉を濁<sup>にご</sup>してしまった。

すると、父がいないことをいいことに、マユミが動き出す。

ソファーに仰向けでいる俺の上に、マユミがいじらしい手つきで触れてくる。

「ああっ……」

逃れようとしたが、すでに乗っかっているマユミの体が邪魔をしている。

「ごめんね」

そう言い残し、俺の脇腹を刺激し始める。

「マユミさんっ！マユミさんっ！」

何かに取り憑<sup>つ</sup>かれたかのように、両脇腹をくすぐり始めた。

「まってっ！本当にっ！あひっ、あひっ……」

何を言っても、やめてくれない。

「何でっ！……こんなことっ！……」

苦しんでいるユウトを、哀れ<sup>あわ</sup>みの表情で見下してくる。